

去からすでに三十年を経た。後半には初めて当社に詣でた感慨がうたわれている。

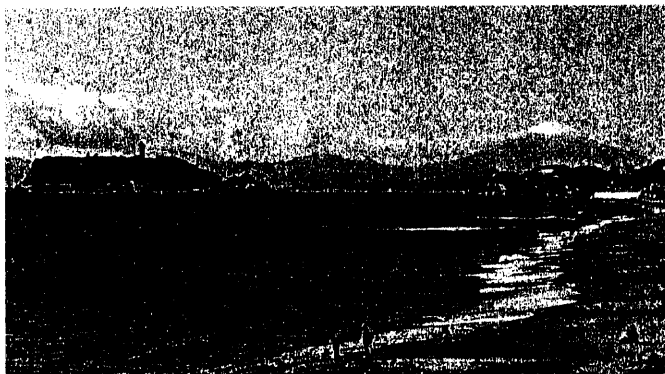
《後藤新平詩碑》二の鳥居前。政治家後藤新平の奉獻。碑文は「森嚴羽衛老將軍 功勳亦兼武与文 遺以不離忠孝旨 千花千月又思君」。御祭神の文武における功績と忠孝の徳を賞賛し、「千度花が散り千度月が巡ってもさらに君を慕い奉る」と詠じている。御祭神の台湾総督在任時、後藤は民政局長（のち長官）に任じられ、植民地であつた台湾の運営と近代化に手腕を発揮した。

《石黒忠恵詩碑》二の鳥居前。子爵石黒忠恵（いしぐろただのり）の奉獻。碑文は「出將入相無匹儔 武功文勳傳千秋 英魂長鎮画島裡 天明海洪浮白鷗」。御祭神の比類なき文武の功績は千年先まで語り伝えられるであらうと絶賛している。この詩を献じた時の石黒は八十七歳、後半の句には江の島そのものを御祭神の御霊屋と仰ぐが如き心情が伺える。石黒は陸軍軍医総監も務めた軍医であり、医学者として西洋医学の普及に努め、日本赤十字社長などを歴任した。

《爾靈山高地の石》二の鳥居前、左端。旅順二〇三高地の石。横須賀鎮守府が日本に持ち帰つて別地に寄贈したが、のち当社境内に移設された。爾靈山（にれいさん）の字は「なんじの靈の山」の意で、乃木希典將軍の命名である。

《狛犬像》拜殿前。第十三代台湾総督石塚英蔵の寄進。作者は不詳だが名工の作と伝えられ、台湾観音山の石で作られている。口の中で動く丸石は初めから彫り抜いたものである。姿形は独特であり国内に類例を見ない。端正にして生気みなぎり、靈獣の名に恥じない逸品である。

〔平成二十三年七月〕



◎交通案内

《JR》藤沢駅または大船駅から

江の島行きバスに乗り、

バス停より徒歩五分。

《小田急線》片瀬江ノ島駅下車、

徒歩二十分。

《江ノ電》江の島駅下車、

徒歩二十分。

《モノレール》江の島駅下車、

徒歩二十分。

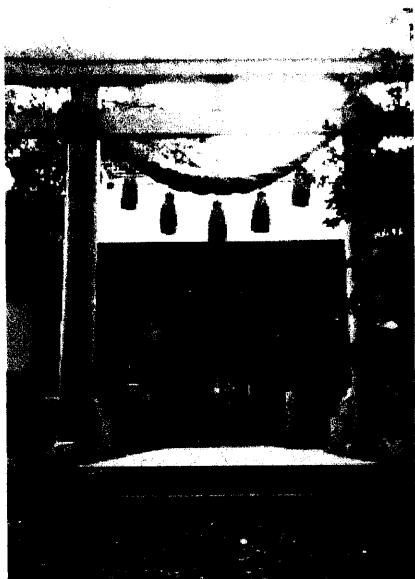
◎祭事暦

一月	一日	歳旦祭
五月	二日	例大祭
六月	三十日	夏越祓
七月	二十三日	例祭
九月	五日	日露戦争慰霊祭
十一月	二十三日	新穀感謝祭
十二月	三十一日	大祓

◎児玉神社社務所

住所 〒二五二-〇〇三六
藤沢市江の島一四一三
電話 〇四六六（二）二四一〇
Fax 七二五二

勝運の神 児玉神社





御祭神 児玉源太郎命
御神驗 勝利・英知・福運
例大祭 五月二日

由緒

御祭神児玉源太郎命（一八五二―一九〇六）は、明治陸軍ならびに政府の中枢として縦横の働きをされた偉人です。卓越した軍略の才と政治手腕をもつて知られ、陸軍大臣・陸軍大学校長・文部大臣・内務大臣・台湾総督等の要職を歴任。また教育文化の面でも成城学校第七代校長を務める他、郷里徳山に私費で図書館（児玉文庫）を設立なさる等、前途有為な青少年の育成に尽力されました。

明治三十六（一九〇三）年、満洲を占拠した大ロシアが朝鮮半島支配を狙い、我が国は国家の存亡を賭けてロシアと対決せざるを得ない局面を迎えました。開戦当時、ロシアの圧倒的な軍事力の前に、欧米諸国が悉く日本の敗北を予想する中で、世界的な戦術の権威であるドイツの軍人K・W・ヤコブ・メッケルが、「日本には児玉がいる。児玉がいる限り日本陸軍が勝つ」と看破した逸話は有名です。はたして、御祭神は祖国に一身を捧げる決意のもと、次期首相と目されながら内務大臣の職を辞し、自ら降格して大本営参謀次長となり、対露作戦指導に全力を傾注されました。いざ開戦となつては満洲軍総参謀長の印綬を帯びて出陣、見事祖国防衛の主導的役割を果たされたのです。特に難攻不落と言われた旅順要塞の陥落は、御祭神の直接の指揮により成功した作戦であり、日本の勝因のひとつとなった激戦として、「二高地」の名で知られています。

救国の英雄と讃えられつつ、御祭神は日露戦争ですべてを燃焼されたかの如く、明治三十九年七月二十三日、五十五歳にして急逝されました。三回忌を期し、親友であつた杉山茂丸が、御霊をお祀りすべく向島の私邸に社を建立したのが児玉神社の端緒と考えられます。後年、御祭神が江の島の風光を愛でてたびたび訪れた縁から、現在地に遷座されました。十三回忌に当たる大正七（一九一八）年、公認神社への昇格請願が内務大臣に受理されたのを受け、奉賛会長の後藤新平を始めとして石塚英蔵（第十三代台湾総督）・小山健三（実業家、大阪財界の重鎮・柳生一義（第二代台湾銀行頭取）・山本悌次郎（台湾製糖常務取締役支配人）・荒井泰治（台湾商工銀行頭取）の計六名を発起人とし、社格（県社）にふさわしい社殿の新営運動が推進された結果、大正十年七月に主要社殿が建立されるに至りました。施工監督は横沢次郎（台湾総督秘書官）、土地約二千坪は中村豊次郎（初代の児玉神社総代）の寄附でありました。

なお、発起人諸氏醸金として台湾銀行を始め多くの植民地関連企業とその関係者が名を連ね、献燈は満洲と台湾関係者で占められています。造営に際しても、御祭神が九年間治政に当たられた台湾より幾多の寄贈を受けており、鳥居燈籠の寄進にとどまらず、社殿は阿里山の檜を用いた総檜造です。設計は伊東忠太工学博士（神社建築の第一人者）が担当しており、ゆえに当社社殿は間然する所なき近代神社建築の模範と称えられています。ちなみに、一部の鳥居と燈籠には徳山産の花崗岩が用いられています。

戦後の混乱期には境内が荒廃の極みに達しましたが、徐々に復興が進められ、平成十四年には御生誕百五十年の記念大祭が盛大に斎行されました。さらに平成十八年には帰天百年目の大祭を執り行いましたが、李登輝友の会のご尽力により、李登輝前台湾総統に「児玉神社」の文字を揮毫頂き、扁額にお作りして拝殿に掲げ、御神徳を仰ぎ奉りました。勝利・英知・福運の神として、近年とみに内外の崇敬を頂いております。

境内の文化財

《山県有朋歌碑》 参道入口正面。明治の元勲山県有朋の建立。もともと向島の私祠内にあつたが、遷座の時現地に移された。碑文は「児玉藤園の身まかりける日讀みける 有朋 越えはまた里やあらむと頼みてし杖さへをれぬ老のさかみち」と刻す。朋友であつた山県が御祭神の逝去を「老いの身のたよりとしていた杖が折れた」と嘆き、断腸の思いを詠じている。下段には山県の側近であつた政治家芳川顕正が、御祭神と山県とを龍虎に喩えた詩を添えている。

《謝介石詩碑》 二の鳥居前、右端。満洲国初代外交総長を務めた台湾人謝介石の奉献。碑文は「仗鉞登壇衆所尊 功成百戰得雄藩 大賢自著多聞政 賤子頻嘗有味言 萬里驅馳思景行 卅年事變潮重源 神鴉社鼓江之嶋 矍相當時蓋僅存」。国民の尊敬を集めた御祭神の武勲と才知、徳を讃え、併せて在りし日にお聞きした御言葉をつかしみ、馬を万里に駆けさせた雄姿を偲んでいる。かれがこの詩を奉じたのは大同元（一九三二）年、御逝